
リトルタウン

多田野一兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルタウン

【Zコード】

Z4200C

【作者名】

多田野一兵

【あらすじ】

田舎の電子部品関係の工場で働く慶と亮輔はこの4月から昇進。新しい仕事をひたむきに頑張っている。偶然、昔の彼女の香織と再会するが、なかなかお互いの想いが重なることがない。そんな中、突然の量産の対応のため中途採用で派遣社員を増員。その中に、慶の現場へ配属される奈美がいた。奈美はすぐに新しい仕事に溶け込んで行く。そして、上司として働く慶に次第に魅かれていく。

File 1 昇進

昔、この町は城下町として栄えていたそうだが。
でも、今はただの田舎町。

山脈の終点に位置し、裾野から平野が広がる。
平野には田園があり、そこにポツリと巨大な建物が存在する。
そこは電器関連の工場。

大手家電メーカーの工場であり、高卒就職が一般的な
この町では、この工場で働くことがステータスとなっている。
この町にも、そして工場の中にも、様々な人間がいて、
その人々が様々な「想い」を日々育んでいる。

「慶、おめでとうー！」

慶の先輩で、現場リーダーの亮輔が突然そう言つてきた。

慶は何の事だかさっぱりわからないが、「あ、どうもっす」と、適当に返事してみる。

「へえ～～、もう知ってるんだー？」

亮輔が少し意地悪そうに言つ。

「ちょ、まつてください、すいません、何の事が教えてくださいよ

～～

慶は焦り気味に亮輔に問い合わせる。

亮輔は少し嬉しそうな顔をしながら、

「オマエ、4月からリーダーだ！ よかつたなーー！」
と、4月から昇進することを告げてきた。

「俺が現場の責任者になることになつたんだ。
そんで、オマエが俺の後を継ぐつてこと」

「正式な辞令がもうすぐくるだろ？ 早くオマエに
知らせたかっただからね」

亮輔も自分の事のように嬉しそうに言つてくれた。

「あ、亮輔さん責任者になるんだーー！」

それは亮輔さんこそおめでとうござります」

慶は自分と亮輔が一緒に昇進することがすく嬉しかった。

慶と亮輔は、田舎にある電子部品製造工場で働いていた。
お互いに高卒で就職し、亮輔のいる現場へ慶が新卒で配属され
た。

それからはお互いに親友であり同僚であり、上司と部下であつて
親密な関係を保つてきていた。

慶の相談にいつもつてくれる亮輔は、慶の心強い兄貴分である。

「慶、これからは俺たちがこの現場を引っ張つていかなくちゃいけ
ないから

お互い頑張ろーなー！」

亮輔も慶をパートナーとして、これから仕事をしていくことが嬉し
かった。

「中野 今日から現場のリーダーとして責任をもつて職務にあたってくれ。」

森山も責任者になつたことだし、お前たちは仲がいいだろ？」

森山を盛り上げていつてやつてくれよ！」

田中課長は慶と亮輔を呼び出し、一人を激励していた。

「森山 お前は今日からもう一ランク上から物を見なくちゃならな
い。」

園田君はこの現場は初めてだから、しばらくは君も係長並に
働いてもらわなくちゃいかんぞ。

中野もリーダーになつたことだし、仕事はきつとやりやすいはず
だ。

一人で力をあわせて現場を盛り上げていつてくれよ」

「はい！」

二人は示し合わせたかのように「はい」の声が重なった。

「ほんとお前らは仲がいいな、はははあ」

田中課長は高笑いすると同時に一人の仲の良さと

互いの信頼関係が頼もしく思えた。

「頑張らせて頂きます！」

亮輔は気合の入つた声でそう宣言した。

「僕も頑張ります！」

慶も負けずと大きな声で言つ。

今日から一人で現場を管理していかなくてはいけない。プレッシャーを感じながらも、これから仕事が二人にとっては充実した仕事になることが手に取るようになかつていて。

「人は昇格後まだ慣れない初仕事も順調に進め、生産の遅れも、大きな問題も無く4月度の生産を終える事ができた。

「6月から、生産増えるらしいぞ」

亮輔は係長から6月の生産状況を聞いてきていた。

「人も増やさないと、今は結構ギリギリだな～」

「そうですね、数次第ですが、ここここに一人ずついないとすでに限界近いからですね～」

慶はパソコンの工程図を指差しながら亮輔に言った。

「そうだよな～、数わかつたらすぐに入員補強の要請しようま、そうは言つてもまだ5月がある。

5月を順調に進める事もまず大事だぞ」

と亮輔は上司らしく慶に言つてみた。

「お、そうですね、亮輔部長！！」

「何言つてんだオマエ、ま～いい。

今日は久しぶりにメシでも食いにいくか～～！」

慶の冗談を軽くあしらつと亮輔は慶を夕食に誘つた。

「じゃあ、山下達も誘つてばあ～～と行きましょう～～！」

「な、に親父みたいな事言つてんだか・・・。
亮輔は自分の誘いにいつも応えてくれる慶が
本当の弟のように可愛く思えた。

慶と亮輔は、現場の作業者数人の若者を連れていつもの居酒屋へ足を運んだ。

居酒屋は6人入る個室が6部屋あり、フロアにテーブルが数個、カウンターに数席とよくある程度の居酒屋だが、焼酎の品揃えがよく焼酎を好んで飲む慶と亮輔には丁度いい居酒屋だ。

「おまえら好きなだけ注文しろ！…！」
上司らしく威勢がいい亮輔に

「お、今日は亮輔さんのおじりだぞ、ラッキ～～と慶は皆に意地悪そうな顔をして言った。

「やつた、亮輔さんありがと～～ざいます！」
まだ入社して3年目の山下も喜んだ。

「ばつかか、おまえら。

今日はな、俺と慶のおじりだ。
俺一人が奢るわけじゃないぞ？」

「な～～んだ、俺もかよ～～」

亮輔が勝手に決めた割り勘も慶は嫌々ながらもそれを断ることはなかつた。

「ま～～、そうと決まつたらお前ら遠慮せず注文しろよ」

慶は後輩たち3人に少し太っ腹な所を見せる。

「心配するな、ここは俺が出ておくから。」

「まじですか、俺も出してもいいんですけど・・・」
亮輔は慶にも先輩らしく気を使い、割り勘の話は冗談であることを告げると

慶はそれは悪いと思ったのだが、正直あまりお金は持っていないなかつたので
自分も出しますとは言い切れなかつた。

「心配するな、オマジの前、車の部品なんか買つてただろ?
俺はよくわからんが・・・。今月は苦しいだろ?が。」
亮輔は慶の事をよく知つていた。

「じゃ、お皿葉に甘えて・・・、すんませんいつも
慶は亮輔の面倒見の良さには世話をなりっぱなしだった。

居酒屋で一通り盛り上がって、店を出ると慶が
「さて、次はどこに行きますか?」
とやる気満々。

慶はいつも雰囲気が好きで、飲みだすと止まらない。
また亮輔も同じで一人が一緒に飲みだすと朝になることもしばしば
だ。

後輩3人もそういう一人が好きでよく遅くまで付き合つが
最後まで残つたことは未だ無いほどだった。

「じゃあ、クラージュ行くか！？」

亮輔がいつも行くスナックに行くことにした。

「んじゃ、そうしましょー！」

「クラージュのママとおさんとも2週間ぶりつすね！」

慶はニヤついた顔でそう言いながら、クラージュへ向かった。

しかし、クラージュに到着すると、店のドアに

「4月28日～5月2日まで休業致します。」の貼紙があった。

「なんだ休みかよ～～

「あ～、なんかママこの前来た時に旅行にいくとかど～とかって言つてなかつたっすか？」

亮輔が残念がると慶が2週間前に来た時の話を思い出して話した。

「そつか・・・、んじゃそ、知らない店についてみよしちゃせ！」

亮輔が好奇心旺盛な顔をして、皆で言つと首もまわせりでなくこれまで行ったことの無い店にいくことにした。

「じゃ、この店の2件右側

「お、いいね、そういうの、

慶は次に行く店の選び方を適当に言つただけなのだが
亮輔もそつこいつ選び方の適当な所が好きで賛成だった。

「じゃ、山下見て来い！～
と、亮輔が山下を指す。

山下は仕方なく、クラージュから2件右隣にある、「深海」

と並んで店を覗いてみた。

ドアを少し開けた山下は、初めての店で緊張したのか
すぐにドアを閉め皆のところへ走り戻ってきた。
「やっぱ、はずかしいっすよ～」

すると数秒の間も無く

「お密や～～ん、入らないの？？」

クラージュは昨日から皆で旅行に行つたみたいで、休みだけど。。
よかつたらウチ来ない？」

山下に気づいた深海のホステスが一人店から出てきて
クラージュの前に立つて、5人に向かってそう行つた。

慶はふと思つた。

「えつ？？」

「あれ？、ケイじゃない？

久しぶり～～！ わ～～、こんなところでケイと会うなんて嬉しい！
おいでおいで！ 露さんもおいでよ～～」

とホステスは慶との再会をすごく嬉しそうに言つた。

「なんだ慶、知り合いか？」
亮輔がキヨトンとして尋ねる。

「あ、はあ、高校の同級生で・・・」

慶もすぐにホステスが香織であることに気づいた。

「じゃあ、仕方ないな、そこ行ってみるか？」

そこのおねえちゃんも綺麗だし
と亮輔は他の後輩3人に尋ねる。

「はい！お姉さん綺麗だからいいっすよーーー。」
「慶さんの知り合いなら安くしてくれるかなーー？」
と後輩達も乗り気だ。

「じゃあ、行きますか・・・」
慶はあまり行きたそうではないが、皆の空氣に負けて
深海へ行くことにした。

「お、じゃあ決まりねーーー。
さーおいでおいでーーー！」

香織は嬉しそうに5人を引きつれ、お店のドアを開けると
「ママ～～、私の元彼氏とその他4名ご来店です～～」
と、恥ずかしげも無く大声で言つた。

「えつーー？」と4人ほぼ同時に慶の顔を見合わせる。

「・・・・、ゲッ、こいつ・・・・」

慶はなんだか恥ずかしくなり、言葉にもならなかつた。

「あらあらいーーー、元彼氏さん？」「
とママが駆け寄ると、他のホステス3人も
「どれーーーどれーーー、香織さんの元彼つてーーー
と興味津々で近寄つてくる。

慶はすぐに気を取り直して

「そう！俺が香織の元カレだけど、なんか文句あるかーーー？」
と4人に負けじと声を荒げた。

亮輔と後輩達はこいつなにやつてんだ?と思つてゐるよつたな表情で
その光景を見ていたが、すぐに

「さあ、さあ、早く飲ませてよー!」

と亮輔が声を掛け、深海になだれ込んで行つた。

お店に入ると、まだお客さんはおりず
香織が大声であんなことを言つたのも
客がいないからなんだろうなーと慶は勝手に思ひ込んだ。

慶がボックス席の4人掛けソファーに座ると、

慶のすぐ横に香織が割り込んで無理やり座つてきた。

亮輔の隣に1人と後輩3人に、ママと2人のホステスが付いた。

「しつかし、慶さんあんまり格好良くないのに、よくこんな美人と
付き合えましたねー」

と後輩が慶の反応を楽しむかのように言つて來た。

「ふん、こいつが俺を好きだつていつてきたから、付き合つてやつ
たんだよ」

「なーーにいー? ケイの方から私に近づいてきたでしょ??.」

慶が後輩に答えると、それを聞いていた香織が慶に少しムツとした
顔で言つた。

「なんだ、でもコクつてきたのは香織だらーがよー~

「それはそうだけど、ケイがイジイジしてたからでしょー」

一人が少しアツくなろうくなるまいかと言つ間を見計らつてか

「まあまあ、そりやー君達お互い様だと亮輔が冷静になだめる。

「はあー、そうですかねえ・・・」

と慶は仕方なさそうに言った。

「で? いつ頃付きましたの?」

亮輔は少し意地悪な顔をして、嬉しそうに尋ねる。

間髪入れず、香織が

「えっとね、高校2年の時にね、私が自転車で通学してたらねいきなり、隣にならんできてね

『へへ、君が3組の山野香織さん?』とか言つてきてね~私はなんだこの変人つて思つたんだけど、

それから段々、隣に並んでくる回数が増えてきてね

結局、卒業するまで無理やり一緒に通学させられてたんだよ」と勝手に答えると、慶は自然と顔が紅潮していた。

「はずかしいからやめてくれ・・・。」

「そんで、お互い就職してから、2年後くらい、そう一度20才くらいの時かな

突然別れてくれだつて・・・。

ほんと信じられないよね、この人!!!」

香織は聞かれてもいい別れの話まで話した。

「な~んだそれ??」

「ひつどーーーい」

慶は大ブーリングを浴びた・・・。

そんな話から始まり、それぞれがホステスと話したり、仲間同士で話したり

はしゃいでる間に時間は過ぎて、すでに1時間ほど経っていた。しかし、21・30頃になつても他の客は見当たらなかつた。

「・・・だから、あれはね、違つの、違うんだって」

「だつて、ケイが悪いもん」

香織は相変わらず慶に絡んでいる。

香織は慶と再会できたことが相当嬉しいらしく、ほとんどの時間を慶との会話ですゞしていた。

「だからね、俺は香織が・・・」

と慶が話さうとした途中で、お店のドアが開いた。

「いらっしゃーい！」

あ～川崎さん、いらっしゃい……」

香織は、慶と話をしていた顔とはまた別の顔に瞬時に戻りホステスの顔になつた。

「「めんね、ケイ。 私あつちにつかないといけないから・・・」と少し淋しそうな顔をした。

「ああ、いいよ、いいよ、仕事だら」

慶もまんざらではなかつたらしく、香織と離れるのが少し淋しいよつて思えたようだ。

それから、お店の客も次第に増え、慶達の席にはホステス一人が残つただけになつていて。

「あ～、もう23：00か～～
じゃ、次でも行くか～～！～！」
と亮輔がこの店を出ることをホステスに告げると
「え～、もう帰っちゃうの～～？」
お決まりの返事だ・・・。

慶達がお勘定をしている様子に気づいた香織は少しソワソワし出して
慶達が店から出るや否やすぐに慶を追つて、店の外まで飛び出して
きた。

「ねえ、ちょっとケイ！
元力ノに携帯も教えないのかよ！～！」
と香織は強気で慶の電話番号を聞いてきた。

「なんだ、香織ちゃん！　まだ慶の事好きなんじゃないの？」
亮輔がおちゃらけて言つ。

「いいな～～、こんな綺麗な人
後輩達も羨ましそうに見ていた。

「違いますよ～～、ほら、営業、営業ーー！」
「早く教えなさい！ケイ！」
と香織はさらりと話をかわす。
流石は、プロだけのことはある。

「仕方ないな～・・・」

「あんまり無駄に掛けでくんないよなよ」と言しながら携帯番号とメールアドレスを香織に教えた。

「ふん、誰が用も無いのに掛けるもんか。お店が暇な時だけ電話してあげるー。」

香織は、相変わらずの調子だ。

「んじゃ、もうやろ行きますか」

亮輔がやつら「ひど、

「んじゃ、いー」

「次行ーーー」

と咄も続いた。

「じゃ、また来てくださいねーーー！」

と香織は笑顔で見送ったが、その後少し淋しそうな顔に変わった。

「なんか最後香織さん淋しそうな顔してませんでしたか？」

それに気づいた山下が、慶にこっそり話しかけると

「えつ？？めちゃめちゃ笑って、また来いつつてたろー！」

「いや、その後なんですけど・・・」

山下が言つには、見送る最後に香織が淋しそうな顔をしていたと言
う。

「そりゃないだろーーー」

慶は笑つて、前を向いた。

File 3 メール

深海を出た慶達は、亮輔の行きつけ2号店
プラネタリウムに行くことにした。

名前はプラネタリウムだが、まったくプラネタリウムの設備など無く
ママもプラネタリウムが好きと言うわけでもなく・・・。
少し小さめのスナックで、ママとホステスが2名
ボックス席が3席あり、2席は埋まっていた。

亮輔がお店に入ると「あつ、りょうちやんだ!!」と
カウンターにいた20代半ばの大人っぽい雰囲気のホステスが
嬉しそうに歩みよってきた。

「あゆみちゃん、今日、5人ね！」

「は～～い」

あゆみはすぐにボックス席に案内し、
お酒の準備を始めた。

「あゆみさんって言つんですか？あの人は 純麗ですね～～

「オマエさつきからそればっかだな・・・、ホント・・・」
山下があゆみを見て言つと、慶が呆れ顔で答えた。

「でも香織さんの方が絶対綺麗つすよ」

「オマエ、香織に惚れたな～～！？」

山下は後輩達の中でも、気安くで軽くしゃべる。

そんな山下を慶は特によく面倒を見ていた。

「はーい、亮ちゃんこりひしゃこ

「歯もかんぱーい。」

あゆみは酒の準備ができると、亮輔の隣に座り勝手に乾杯の音頭を取つた。

回りから見ると、どう見ても座しこ、一人。。。

「亮輔さん、なんかあゆみさんと座しこすよーー。」

山下は思わず口に出してしまつた。

「あーーーら、あなた達知らないの?」

亮ちゃんはね、私のお気に入りナンバー1なのよ

「何言つてんだ、あゆみちゃん。。。」

今度は山下で深海での香織と慶とのやり取りが再現されたかのようだつた。

亮輔は容姿端麗で気さくな性格の上、よくスナックなどにも飲みに行くため

街のホステスの中でも、イイ男として結構有名だったつする。

「亮ちゃん、今田いわはま家におこでよーー」

「バカ、そんなこと言つてたら勘違しされるだろ?」

「ここでも静かなバトルが繰り広げられていた。」

そんなやり取りを見ざる聞ざるでいた、慶や後輩達は

カラオケを歌つたり、仕事の話をしたりして楽しんでいた。

1:00を過ぎた頃だらうか。

慶の携帯のメール着信音が鳴った。

慶は今頃だれだらう?と思ひながらも

密かに香織からのメールかもしれないと期待しながら携帯電話を開

いた。

「お、やっぱ香織からじゃん!!」

ああいう態度をしてはみたものの、やはり香織からのメールが嬉しかった。

4月30日 1:08

「TO」香織

「Title」今日はありがとう

今日はお店に来てくれてありがとう。
久しぶりにケイに会えて嬉しかったよ~

ところでさ、今日言いかけてた
いいわけの続きを聞きたいな・・・。

「俺は香織が・・・」の続きをさ。

電話でもメールでもいいから待ってるね!

「・・・・。何いいわけ? 何かいいかけてたっけ・・・」

慶はすでに酔っていたせいで、何を言いかけていたのか忘れていた。

「う～ん、何て返信すれば・・・」

と考えてみると

「慶さ～～ん、歌歌！ 慶さんの歌ですよ！」

山下がわざと言いつと、慶はふと我に帰った。

「ああ、俺の歌う番か～～」

歌を歌いだすと、歌つている間に盛り上がり、また音ではしゃぎ始めた。

そうなるともうメールの事を考える間も無く時間は刻々と過ぎ
2：30 プラネタリウムの閉店の時間になつた。

店を出るとすぐ

「俺もうダメっす、帰つていいですか？」

「ああ、そうだな、もつこんな時間だしお開きにすつか～」
後輩達がダウン寸前のため、3人をタクシーに乗せ
慶と亮輔はそれを見送つた。

「慶、俺今日はあゆみちゃん家いつちやおうかな～～

「えつ？？結局約束しちゃつたんですか？」

「ああ、なんかだんだん俺もその気になつてきひやつて・・・

「あ～～らう、俺知～～らない！

でも亮輔さん、彼女もいないし別にいいんじゃないんですか？」

「ね、ね、そうだろ？ ちょっと行ってみようかな～～」

「ああ、んじゃ、オマエも香織ちゃんと同じだよなー。」

慶は亮輔の言葉でメールの事を思い出した。

「やつべメール返してない・・・」

なんだ、オマエさつき携帯をわってただろ。・・。

それじゃあお疲れ様です！」

「ああ、じゃあな～」

そうこうと、亮輔は暗闇の中へそそぐたと泣えていつた。

果然と立ち尽くしていたのは慶。

ふと時計を見ると3時前。・・・。

メーレの政治がつらひながら、ハリハリ

メールをすぐに返さなかつたこと

時間が近くないでしょ。かよ
色んな思いが重なつて、一層メールの返信をすることができなかつ
た・・・。

「そりか、寝てた事にしようつ・・・」

こういう部分は楽天的だ。

結局、慶はメールから逃げ、家へ帰つて寝ることにした。

翌朝と書つてもよい。一〇〇

慶は田原と連絡すると、早速香織にメールしてみることにした。

〔トヨ〕香織

[二三七] エリザベスの心事

卷之三

明月山房

「ううん、今の俺にはこれくらいしか打てない……」

慶は、結局このままメールを送信した。

朝食をパンで済ませた慶は携帯を見るが返信が来ない。

わかんないもんな

「そう思いながら、愛車のフォレスターを駐車場で洗車する」といっ

六

14:00 洗車が終わつた慶はもう一度携帯を見てみた。

「・・・・。」
なんだまだ返信ねーじやん。

無視されたんかな・・・」

「まあ、いいか……」

少しへ口み加減ではあるが開き直つてみた。

香織からの返信をあわらめた慶は「ラーメンと買い物でもしよう」と街へ出かけることにし、身なりを整えていると

「ピ～ンポ～ン」

玄関の音ではない。

慶の携帯メールの着信音だ。

慶はあきらめたつもりだったが体が勝手に素早く動き、携帯を開いた。

- - - -
4月30日 14:23

「F r o m」香織

「Title」ば～～か

「メン、やつ起きました。」

昨日のメール気にしなくつていいよ。
話が途中だつたから、気になつて

どうせ話の内容覚えてないんでしょう？？

- - - -
- - - -
- - - -
- - - -
- - - -
- - - -
- - - -

「ふむ、やっぱり話覚えてないの気づかれたか……。
相変わらず鋭い……。」

「From」香織
「Title」Re:ば～か
- - - - -
なんだ、今まで寝てたのかよ。オ
マエよく寝るな～～！ま～、話は
まじで覚えてない！～すまん・・・
。

「よし、これで完璧ーー！」

慶は返信した。

5分後

- - - - -
4月30日 14:33
「From」香織
「Title」そつか
- - - - -
ケイは相変わらずバカで単純だね！
そんな所が好きだったんだけどね！

でもね、少しば氣を使いなさい氣を。

例えば、

「もしかして遅くまで俺の返信

待つてたの？」

とかさーー、あつてもいいよねーー

普通 · · ·

あとで、メールにはね「改行」入れた方がいいよ!

ケイのメール読みにくい・・・。

「なんだこりや・・・」

[From] 香織

Title [e] Re: そニカ

あ、うん。ですか。『めんぱー』。

改行を少し入れてみました。

これで宜しいでしょうか？

まー俺のせいで眠れなかつたわけだ。

正直スマンかつた。

- - - - -

25

と、昨夜の調子で香織へ返信した1分後

- - - - -
4月30日 14:42
「Front 香織
「Title」わかりました
- - - - -
ば～～～か!!

もういい。

「なんだこれ??」
「キレたか・・・」

こうなると雰囲気が悪く、慶も香織にメールを返信することができなかつた。

結局、これから数週間はメールも電話もやり取りがなかつた。

File 4 新入社員

「ゴールデンウイークも終わり、5月も中盤にさしかかった頃。

「慶、慶、6月以降の生産数大体見えてきたぞ～～」

「お、ついにわかつてきましたか～～！」

慶と亮輔は、6月の生産に対する人員不足数を早速計算し始めた。

「やっぱ、ここにこは絶対1人ずつは欲しいですね」

「うん、やっぱうだな～」

「あと俺的にはここにも1人欲しいんですけど・・・」

「う～ん、そつか。そこは係長に相談してみないとわからんな～」

亮輔は2人の補充で当分はどりにかできると思つてはいるのだが
慶はあと1人追加した方がいいと判断している。

「なんでも、そこあと1人必要なわけ？」

「ああ、ここですね、意外とストップ多いんですよ。
で、準備つていうかそこをストップさせないための
準備+余った時間で他の工程の育成とか
ま～、他の工程の準備とかできたらいいな～って

「ああ、なるほど～～。そういうわけか・・・」

亮輔はしばりく考ふ、

「えじや、やつぱ係長こ3人必要つて強く囁つてみるわ」

「お願ひしまー。」

亮輔は慶を信頼しているせいか、慶の意見にはよく耳を傾けてくれた。

それから1週間後

「慶、昨日言つたけど、今日の昼から新人3名引渡すからな

「あ、はーはーお任せあれ」

「今、有る程度の教育してるんだけど、3人とも女の子でさ
2人はめっちゃかわいいぞ!」

「えつ、まじっすかー?」

「ああ、特にな岡本つて子、超かわいい

「おお、それは楽しみだ・・・」

「まあ、それはさておき昼からは現場の方の説明と注意事項
オマエが全部指導するようこ

「えつ、俺そんなのやったことないですよーー

「ま～、大丈夫頑張つてくれ」

慶と亮輔は、新人3名のスケジュールを軽く打ち合わせた。

午後になると、早速亮輔が新人の女の子を現場へ引き連れてきた。
「え～と、紹介します。

君達が配属される工程のリーダー 中野 慶 君です。」

亮輔は早速、新人に慶を紹介した。

「中野です。まだ新人リーダーなんですが、皆さんのお役に立てる
ように

頑張りますので、皆さんも是非期待に応えてくださいね」

「なんじゃ、そりや・・・。なんの挨拶だよ・・・」

亮輔が慶に少し意地悪を言ってみた。

「いいじゃないですか、挨拶ですから～～・・・」

それを見ていた3名は緊張の糸がほぐれたのか
クスクスと小さな声で笑いながら顔を見合させていた。

「えーとじやあ、中野に君達の紹介をするね」

と言つと、一番左側の子を指し、順に

「山田君、次が岡本君、で西田君ね」
と紹介した。

「よろしくお願ひします。」

3人は少し声を合わせながら、慶に挨拶した。

「いえいえ、こちらこそ」
慶也それに笑顔で応えた。

「では、あとは中野が全部君達に教えるから朝教育したこと、これから中野が教えること全てこの工場では守るよつにして下さいね」亮輔は真面目な顔に戻り、3人にそう言った。

「んじゅ、慶、あとまわしへー。」

そういうと、亮輔は事務室の方へ戻つていった。

「えへへと、あへへ、一応どうごつ順番で教えよつかと教へてはいたんだけど

慶は思わず本音を漏らした。

すると真ん中に立つてゐる岡本が

「かんは、てくてくたさー！」
と笑顔で、慶を励ましてきた。

(まじで、)この子かわいいよ・・・

なんて、綺麗な瞳と顔立ちてるんだ……

慶は流石に声には出さなかつたが、心の中でそう囁いた。

「お、おひ、頑張りまー。」

慶は少し、声が裏返りながらも、なんとなく眞面目に答えた。

「うふふ

岡本と山田が顔を見合させながら、そんな慶を見て笑っていた。

「じゃあ、まずは・・・」

慶は順番に工事を案内したり、注意事項や禁止事項を説明また、誰がどの工事を担当するかなどを説明した。

16・30頃になると慶は新人3名を教育ルームへ連れ出した。
「それじゃ、この紙に今日1日で教えてもらったことと
注意すべきこと、わかるだけ書いて下さいね。
16・55になつたら集めます」

と言つと、紙を1人1枚ずつ渡した。

工場内では帽子をかぶつていた新人も
ここでは帽子を脱いで素顔がよくみえていた。

(まじで岡本かわいいな・・・。

山田もなかなかのもんだぞ、これ・・・。 西田は・・・)

といつの間にか男の目になつていて自分に
(いかんいかん、俺は今は教育者だ・・・)

といろいろな思いを巡らし自分と格闘していた。

「リーダー!! 終わりました!!」

「お、早いね〜〜

岡本は時間より少し前に、書き終わったことを慶に告げた。

「でもさ、岡本君・・・。
リーダーは辞めよつよ・・・。
なんかさ、TOKIOのアレみたいでしょ・・・」

と慶が軽く岡本に突っ込んでみると

「だつて、中野さんリーダーでしょ？？
リーダーの方が呼びやすいんだも～～ん」

「・・・・・」

慶失笑。

「いや、でもね、ほら

「中野さん」とか「慶さん」とかや
僕にも一応名前があるんだしさあ～～

「わっかりました。

じゃあ、慶さんでいいですか？」

岡本が今度は軽い突っ込み感覚で慶に尋ねる。

「えつ・・・・。いきなり慶さんかい・・・・

「なかなかヤルな、君は・・・」

慶はもうたじたじになっていた。

「アハハ、冗談ですよ、リーダー」

「明日から中野さんって呼ばせて頂きます」

岡本もさすがに慶がかわいそうに思えたのか少しほと笑顔で答えた。

そんなやり取りをしている間に終業時間となり、
慶は新人3名を帰社させると、事務所へ向かった。

「いや～～、亮輔さん。

岡本ってかわいいけど、アイツは意地悪つすね」

「なんだ？？おまえ早速何かやらかしたか？」

「いや、そういう感じじゃないんですけど、初対面にしては突っ込みが・・・」

「おひおひ、慶、いいじゃないの、生きのいいのが入ってもうこりやつは良く頑張るんだってー」

オマエだって、山下だつてそつだろ？？

「え、いや、僕はそんな感じ・・・。

あ、それより、これ今日のレポートです

「ああ、サンキュー」

亮輔はレポートを受け取ると、早速目を通しながら「へー、岡本ってなかなかしっかりしてるんじゃない？」

「え、まじっすか？」

慶は受け取った時はさうっとしか目を通さなかつたが

20分程度の短い時間でA4の用紙一枚に

今日指導されたことがギッシリと書かれていた。

その夜

慶と亮輔は一人で居酒屋へ行き、一通り飲んだ後、居酒屋を出た。

「慶、ちょっとさあゆみんとこよつてかない？」

「あれれ、亮輔さん、こいつからあゆみちゃんのこと

呼び捨てになつたんですか?」

「ばーか、別にそういうんじゃねーよ。アイツの方が年下だし別にいいだろ~」

「まー、僕はしきらない!
でもあゆみちゃん、美人ですもんね~」

そんな話をしながら、プラネタリウムのあるビルに向かつていると

「あら、香織ちゃんの元カレさん!」
深海のママと偶然遭遇した。

「あ、どうせ先日はお騒がせしました~」

「いいの、いいの、それよりたまにはウチにも
顔出してよね~、香織ちゃんもなんだか
元カレさんと会つてから少し淋しそうよ~」

「ええ、あいつが??. まじっすか?」

「うーん、今日はお熱が出かけつて休んでるんだけどね。
ほら、香織ちゃん今一人だからね、心配だから本当は
香織ちゃんの家によつて来てあげたかつたんだけど、
連絡あつたのが遅くつてね~・・・」

「え、あいつも熱とか出るんですね??.
でも、一人つてあいつ母ちゃんと別々に?」

「うーん、2年ほど前にな、お母さん亡くなつたのよ・・・」

「え、それからずっと一人?」

「ええそうよ」

「まじっすか・・・」

慶は言葉を失つた。

「ほら、よかつたら今から香織ちゃん家行つてきてあげたら、元気になら家の場所もわかるでしょ? きつと轟んで熱なんかすぐ下がるわよー。香織ちゃんー。」

「いやいや、俺は「これから亮輔さんと飲みにいへし、そんなん、香織も迷惑でしょ? ・・・」

「あーーー、冷たいのー! だつたら家の店で飲んでもかなーーー。」

「いえいえ、もひ他予約しちゃつてるかい? ・・・」

「アハハ、冗談よ、また今度、顔出しねー。それじゃ」

「あ、はー、びつかーー」

「はあ、なんか元氣のいいママさんですね」

「しかし、慶いいのか? 香織ちゃんとはあれからどうなつてんの?」

「いや、どうして……。何もなにつすよ……」

「俺、一人でプラネタリウム行つてもこいからさ、香織ちゃんに薬でも買って持つていってやつたひづだ。」

「…………いや、でも……」

「オマエ本當は香織ちゃんのことを気になつてゐるんだがね？」

「ま、まあ……」

「じゃあ、今行かなくてどうする？..

行かなくともさ、責めて薬届けてやるとかメールぐらいしてやるとか、なんかあるだい

「いや、でも、香織ふつたの俺だし、いまさら……」

「慶、オマエ子供だねえ！ そんなの関係ないって。な、とりあえず今日はここで解散だ！」
俺はあゆみと仲良くしゃべりながらセー。

「えへへ、やうすか？」

慶もなんとなく香織が心配で、飲みに行く気分では無くなっていた。

File 5 長い夜

亮輔と別れた慶は、とりあえずメールする」とした。

〔一〇〕 香織

【Title】Re: わかりました

オマエ熱出して店休んでるんだって
？大丈夫か？薬ある？買つてつて
やうつか？さつき偶然深海のママと
会つて、そう聞いたからさ。

「こんなもんかな」「早速メールしてみた。

3
分
後

5月23日 20:58

〔From〕香織

[Title]ありがとう

- - - - -

あるんだね。

ありがとう。

でも、大したことないから大丈夫。

それよりも、ケイのメール見てたら
もっと頭痛くなる・・・。

もう改行忘れたの？

- - - - -

「あ、改行・・・。忘れてた・・・」

「でもなんか、強がってる所が心配だな・・・」

- - - - -

「T.O」香織

「Title」Re:ありがとう

- - - - -

ちょ、電話していい？

改行忘れてごめんな。

- - - - -

メールするよりも電話した方が早いと思つた慶は
香織の状態を電話で確認することにした。

1分後

- - - - -

5月23日 21:00

〔From〕香織

[Title] 118

電話待つてる。

「ごめんなつて、ケイらしくないね。

慶は香織からのメールを確認すると
すぐに香織に電話した。

「もしもし？」

「ああ、香織か？」

「あたりまえでしょ、香織です」

「なんだ、人が心配して電話してんのに・・・」

「うん、ありがとう・・・」

(なんだ、香織素直にありがとうって……)

「でもね、本当に大丈夫だから。

ケイが心配してくれるのすごく嬉しいけど

本当に大丈夫だよ？」

「いや、せっぱ心配だ。

「とりあえずわ、薬飲んだのか？」

「ううん、飲んでない……」

「だろ？ んじや、ちよつと買つていくから。オマエん家、前と変わつてないんだろ？」

薬だけでも届けに行くから、待つてろよ！

「うーん、じやあヨーグルトとか、プリンとか少しお腹減つたから食べたいな……」

「なんだ……？ あー、他こはいらない？」

「うそ、それだけあれば……」

「わかった、んじやすぐ行くから、寝てしまつてねー。」

「じやあな！」

もつその事で頭がいっぽこの慶は香織の「じやあ、待つてるね」の言葉も聞かずに電話を切つた。

それからの慶の行動は素早い。

近くの薬局で薬を買い、コンビニヨーグルトとプリンを2個。タクシーに乗ると、比較的近い香織のアパートにすぐに着いた。

「ピンポーン」

香織が玄関の鍵を開ける音が聞こえるとすぐこの慶が外側からドアを開けた。

そこにはパジャマ姿で、少し疲れた顔をした香織が立っていた。

「香織大丈夫か？」

「うん、大丈夫……」

(なんか、結構重症だな、こりや……)

「とりあえず、寝て。
薬とか用意するから」

「うん」

どこのにあるような普通のアパート。
しかし、香織の性格がとにかく整然としている。

物の置場所は変わっているが、見た感じ

慶が昔見た、香織の部屋とそう変わってはない。
カーテンの色が水色から紺色に変わっていて
部屋のイメージが少し大人っぽくなっていた。

「オマエんち相変わらず綺麗にしてんな～」

「いろいろ見ないでよねーーー」

香織が少し恥ずかしそうに言つ。

「とりあえず食べて」

慶はピーグルトをむりに取り出し香織に渡すと

「プリンの方がいい……」

「ああ、わかつたよ、ほら」

慶はコーグルトを取り上げ、プリンを手渡した。
薬局で買つてきた、風邪薬の箱から薬を取り出し、
水を用意してようやく香織の寝ているベッドの横に座り込んだ。

「よし、プリン食べ終わつたら、薬なー。」

「なんでも2個ずつあるの？」

香織はコンビニの袋に2個ずつ入つていたプリンと
ヨーグルトの事を見ながらそう言った。

「いや、なんか俺も一緒に食べようかなって思つて・・・」

「相変わらずだね、ケイつて。かわいい」

「うるさいなー、早く薬飲めよ」

「はい、はい、うるさいなー、私は病人なんですけどーー?」

と、少し嬉しそうに香織は薬を飲み始めた。

と香織に体温を測らせようとする。
「あ、体温計」
慶は枕元にある体温計を見つけると
「ほれ、測つてみろ」

「これは、やつき測つたからいーーー。」

香織が拒絕する。

慶は香織の熱が高い事がすぐにわかつた。

測れつて言つても、自分の前では絶対測らないだろつと思つた慶は

香織の額へ左手を当て、右手で香織の左手を掴んだ。

「おまつ、やつは熱相当高いぞーー？」

何度あるんだよーー！」

「わざわざ、38度4分だった・・・」

「そりゃいかん、早く横になつて！」

慶はすぐさま立ち上がり、

「タオル勝手に使うぞ」

と言つと、洗面所に向かい置いてあつたタオルを水で濡らし、香織の額へ乗せた。

「これで、すこしあはスッキリするだろ?」

「うん・・・」

「ケイ、ありがと・・・」

「ん? いいよいよ、これくらい。

だつて元カレだしな、俺は はつはつは

と香織に素直にお礼を言われた慶の笑い方は不自然だつた。

ちゅつとした沈黙があつた。

「香織・・・。

俺、オマエ心配だからさ
朝まで隣にいてもいいか?」

「うん、ありがとう。

でも明日仕事でしょ？

あんまり無理はしないでね・・・」

「大丈夫。そんな事は心配しなくてもいい。
どうせ、俺も眠くなつたら寝るだろー！」

「ほんとに？」

「ああ、気にすんなー。」

「うん、わかった・・・」

「ケイ、本当にありがとうね・・・。

私、ずっと一人でいるから、ホント心細くて淋しいんだ・・・

「ああ、わかってる・・・。

全部わかってるから・・・、しゃべるな・・・。

とりあえず、俺の事は気にせず寝ろ」

「うん、ありがとう・・・」

熱で少し赤くなつている香織の瞳が潤んでいた。

それに気づいた慶は、香織がとても愛おしくあり
切なくも感じていた・・・。

(香織は本当に淋しい想いしてゐるんだな・・・)

慶は、眠りはじめた香織の寝顔を見ながら
香織と別れた事を後悔してゐる気持ちに気づいた。

(こんなに、かわいくていいやつなのに……。
俺はバカだなホント……。)

そんな事を考えながらしばらく経つと、慶も座つたまま眠りそうになっていた。

「ケイ? ねえ、ケイ?」

香織がうたた寝しそうになつていて、慶に気づいた。

「眠たいんでしょ?」

お布団敷いてあげようか?」

「ああ、『めん』、俺自分でやるから大丈夫。

香織は寝てな!」

「『めん』、布団はそこの押入れに、お母さんの使つてたやつがあるから、

それでいいなら使つて」

「ああ、わかつた。じゃあ、ちょっと借りるよ……。」

慶は押入れから布団と毛布を出すと、香織の寝ているベッドの隣に布団を敷いた。

「おばちゃんの布団……、悪いな……。」

「ううん、あいつお母さんも慶に使つてもいいの、喜んでくれると思つよ

お母さんも私と一緒に、慶の事大好きだったもん……。」

「そうか、ありがと……」

「今日な、深海のママから聞いたんだ……」

「うん……さつき話した時そうかと思つた。

いいの、心配しないで、お母さんの事はもう大丈夫だから

「おう、そうか、それならいいんだけど……」

「んじゃ、寝るか」

「うん、。。。

ねえ、ケイ？」

「ん？」

「今日は本当にありがと……」

「ああ、いいからいいから」

とは言つものの、一人だけと言つ空気がなかなか一人を
眠らせることができなかつた。

「香織？ 寝たか？」

「ううん、なんだか眠れない……」

「そうか、俺も……」

しかし、言葉が続かない。

「ケイ？ 寝た？」

「いや、まだ起きてる」「みへき

「眠れないならさ、この前の話の続きを教えてくれないかな・・・」

「あー、でも俺本当に忘れた・・・」

「あのね、別れた時の話になつてたのね
それで、ケイが違う違うつて

「で、私は悪くないもんつて私がケイを攻めてたら
ケイが『俺は香織が・・・』つて所で終わつたの。
きっとケイは私が正一君と一緒に居たから
私が浮氣してると思つてたんだしょ？」

「ああ、その時はそう思つて・・・。

その日の夜だつたかな、オマエに電話して
もう別れるつて言つたのは・・・。

あとからすぐに正一から電話があつたよ。

俺へのクリスマスプレゼント。

正一にアドバイスしてもりあつて思つてたんだってな・・・

「うん・・・。

でも、勘違いされるよつなことした私も悪かつた。

だけど、それを知った後でも、何の連絡もくれない慶もひどい

「だからさ、違うの。ほんと違うんだって。

なんか、俺から別れるって言つてしまつたから
また、俺からさ、ゴメン別れるの取り消すつて言つ勇氣が出なく
つて」

「だから香織からの連絡、ずっと待つてた・・・」

「私も・・・」

「ん?」

「私もずっと待つてた・・・。ケイのこと・・・

「そつか・・・。

俺達結局お互い待つてしまつて
そのまま時間だけが過ぎていつてたんだな・・・」

「うん・・・」

「ずっと待つてた・・・。

だからこの前深海で会つた時はすごく嬉しくつて・・・

「みたいだな。

香織、嬉しそうに見えた

「私ね、1時に終わつてすぐにケイにメールしたんだよ。
でもケイはまだ飲んでるのかな〜って思つて・・・。
ケイからの返信、ずっと待つてた・・・。

気が付いたら6時でね、もう外が明るくなっちゃって・・・

「そうだったんだ・・・」

「私、今でも待ってるんだから・・・」

「え?」

「今日、ケイが私の事心配してくれて
前と同じように接してくれて・・・。
あ〜、ケイって変わってないな〜って感じた。
それだけでも嬉しいんだよ」

「そつか・・・」

しばらく沈黙が続いた。

「ねえ、ケイ」

「私達、また昔の私達に戻れないかな?」

「うん・・・」

「俺も・・・、今も好き・・・」

「でも・・・」

「でも何もないでしょ!!--!

「私を、私を幸せにして!!--

「オマ・・・、熱あるのに・・・、積極的・・・」

「もう……話をやらないで……」

「わかつたから……」

「ホント? ?

香織がそう尋ねるが、慶から返事が無かった。

（な～～んだ、寝ちゃったのか……。）

結局香織ははつきりとした答えを慶から聞くことができなかつた。

「ケイ！ ほらケイ！」

起きなさい！ 朝たそ！！

熱が下がって少し元気になつた香織は慶よりも早く起きて、慶を起こしていた。

「う～ん、なんだよ～～・・・」

「遅刻するぞー！もう8：00だぞー！」

慶はさすがに飛び起きた。

「ううそで～す、今6：30」

「なんだよ、まじでびっくりした・・・。
それよりオマエ熱下がつたのか?」

そういうと、また左手を香織の額へあてた。

「うん、もう大丈夫！」

全然熱くなしてしょ??」

「おお、結構下がるもんだな、オマエはやっぱ人間じやねえ……」

「朝から何よ！」

またいつも二人に逆戻りしたかのよつだつた。

「ねえ、ケイ……。

昨日の夜の話、覚えてる？」

「ん？ ああ、途中までは……」

「えへ～？ またへ～？ ・・・。

やつぱりね……」

香織はわかつたまでの元気が嘘であるかのよつて落ち込んでしまつた。

「どうした、香織、気分でも悪くなつたか？」

「ううん、何でもない……」

香織はそういうながら、昨日慶が買つてきたヨーグルトと
買い置きされていた、食パンにマーガリンを塗つて慶に差し出した。
「はい、朝食」

「あ、ありがと……。

・・・・。

てか、何だよわかつたまでの元気は……！
どうした？ 香織」

「だつて、昨日の事が夢みたいで……。

なんか夢から覚めた気分……」

そつ言つと、香織は大粒の涙を流した。

「あ、香織……。

「めん・・・。

そだ、また今度さ、昨日の話の続きしよつー。
ね、時間はいつぱいあるしさー。」

慶は香織にとつて昨日の話がどれだけ大切なものだったのか
改めて知つた。

「だつて、ケイがここから仕事に行つたら、
こんどはいつ連絡してくれる?
会つてくれるの?」

香織はまた以前のように三分の田の前から泣きてしまつたりうな気が
して
慶と離れてしまつのが怖かつた。

「わかつたから、んじゅそ、毎日・・・。
毎日メールくらこす。
それから電話もー。」

「ほんとこ?・・・」

「ああ、ほんとほんと絶対する。
だからせんなに泣いたり、落ち込んだりすんなよ

「わかつた・・・。」

やつこひと、香織はテーブルの椅子に座り

「私も食べる・・・。」

慶に出したはずのヨーグルトを食べだした。

「ケイも早く食べてね、ホントに遅刻しちゃうよ。」

「あ・・・、忘れてた・・・。

てかせ、それ、おれのヨーグルト・・・」

「Hへへ、悪いわね！

でも、ちゃんと冷蔵庫にもう一個あるでしょ？

私の分が」

香織は頬に溢れた涙を拭きながら、慶に明るくそう言った。

「ああ、そうだ2個あつたんだ」

そういうと慶は冷蔵庫からもう一つのヨーグルトを取り出しへテーブルに戻ると食べだした。

香織は少し気が休まつたのか、笑顔を取り戻し慶がヨーグルトを食べる姿をじっと見つめながらヨーグルトを食べていた。

「ケイって、昨日お酒飲んでたんですね？」

「ああ」

「Hiramajidaiya'ekita no?」

「あ・・・、タクシーだ・・・。

セントラルホールの駐車場に車止めたまんまだ・・・」

「仕方ないな〜、じゃあ飯食べたらHiramajidaiyaまで送つてってあげる

ね

「だつて、オマエまだ熱あるだろ、いいよ、どうにかするから……」

「これくらい大丈夫！」

少しでもケイと一緒にいたいから……」

「えつ……。

あ、そう……。

それはどうもありがとう……」

素直にそういうわれると、慶はなぜか少し緊張してしまった。

「アハハ、ケイってほんとかわいい」

「なんだよ、かわいいって……」

一人は朝食を終え、香織は慶を送るための身支度をし
慶はそれを玄関で待っていた。

「お~い、ちよつとやばいから急いでな!」

「はこはこ、もつもつと待つてね!

すぐ行く

そういうと、髪を整え、少しラフな服装に着替えた香織が
玄関へやってきた。

(あれ、香織つてこんなに美人だつたつけ?)
慶はあらためて、香織の美しさに気づいた。

「ねえ、ケイ、ちょっと待つて。
昨日のお礼したいんだけど・・・」

「あ、別にいいよ。うううの」

「違うの、ちょっと、少しだけかがんで欲しいな・・・」

「ん？ こうか？」

そういうと慶は膝を少し曲げ、香織の顔の高さまで自分の顔の高さを合わせた。

香織は少し照れながら、慶の額にキスをした。

慶はそれに驚いた。

「わっ、びっくりした！！」

「へへへ～、昨日はありがとうー！」

香織は何事もなかつたかのようにお礼を言った。

「でも、久しぶりだな・・・」

慶は我に返り、とにかく時間が無いことで頭がいっぱいになつた。
「てか、早く出るべ、まじ遅刻しちゃう・・・」

「ああ、そうだったね、急がなくつちゃ！」

そう言つと、一人は香織のアパートを出た。

香織のアパートから、セントラルホールまでは市街地の中を通る道で、多少混雑していた。

「といひでせ、何がひひじぶつ。」

「え?」

「そつや、家出の前
オマハ言つてただろ?」

「ああ、あれね・・・」

「うそ、それ

「あのね、ケイにチューしたの・・・。
「きっと4年半振りくらこ?・・・。」

「ああ、そつか・・・。
もうそんなになるんだな・・・。

「うん・・・」

「でもや、それから今まで一度も会わなかつたって
不思議だよな・・・。

「こんなに近くに住んでるのこ・・・。

「私はね、何度かケイを見かけたよ・・・。
でも、声掛けるのが怖くって、
隠れたりしてた・・・。」

「さうだったんだ・・・。」

少し車の中の空気が重くなつた。

二人はもつすぐ、別れてしまつたため今はそういう話をしている時間が無い。

お互いにそれをわかつていてか、それからの会話はずまなかつた。

「もうすぐ着こちやうね・・・」

香織が口を開いた。

「ああ、いいじゃん、どうせまた会えるや。」

「ほんと?..」

「ああ、ほんとほんと」

「絶対だからねー。」

「ああ、わかってるって」

「メールとか電話もしてよねー?..」

「ああ、するする、ちゃんとあるから」

「約束だよー?毎日だからねー?..
忘れたら絶対許さないからねー?..」

そういう会話をしてくるうちに、慶が車を止めている場所に到着した。

「それぞれ、俺の車」

「へへへ、なんかカッコいいじゃん」

「ああ、今度乗せたげるなー。」

「ほんと?」

「ああ、それじゃ、時間ないから俺行くな」

「うんー。

ケイ・・・。

ホントありがとうー！」

「ああ、いいから、いいからー。」

そういうと慶は香織の車を降りて、自分の車へ急いで乗り込んだ。

香織は慶が駐車場から出てきて、慶の顔が見えなくなるまで手を振り続けた。

「はあーーあ、帰っちゃった・・・

「でも、なーーんかよかつたなーー」

香織はそう思いながらアパートへ引き返した。

香織の心はいつもより晴れ晴れしていた。

慶は、一度自宅に戻るとシャワーを浴びてすぐに会社へ向かった。取り合えず時間内には会社に着くことができたが、これからが勝負だ。

チャイムが鳴る8：15までに、更衣室で一旦社服に着替え、自分の受け持つ現場に行かなければならない。

慶は焦りながらも、焦っていることを表に出さないようにして、当然であるかのように更衣し、現場へ向かった。

（ふ～、なんとか間に合った・・・）

現場へ到着するとすぐ

「お、慶、今日は遅かったな～。

昨日なにかいことでもあったのか？」

すぐに亮輔が擦り寄ってきた。

「いや、何もないですよ、まじで。

ちゃんと看病してきただけですから・・・」

「な～～んだ、オマエら面白くないのーー。」

「亮輔さん、昨日は」

（キーンゴーンカーンゴーン）

「あチャイムだ」

慶は亮輔が昨日あぬみとどうなったのかと聞いひましたが

結局聞けなかつた。

朝礼が終わると、慶はさっそく新人を集め
今日の作業の説明を始めた。
簡単な説明が終わると、あとは現場の担当者へ付かせ
作業内容を慶が確認するという形だ。

10：40

慶が亮輔と休憩室で休憩していると、岡本と山田が休憩室へ入つて
きた。

「ああ、ちようどよかつた！！」

実は岡本は慶が休憩室へ向かうのを見計らつて、休憩に来たのだ。

「中野さんー朝帰りお疲れ様！！」

「ぶつ！！」

慶も亮輔も飲んでいたお茶を噴出した・・・。

噴出して口の周りについていたお茶を手で拭きながら

「なんだよ、急にびっくりするなあ！」

慶は動搖を隠すかのように言った。

「朝、見ましたよー！」

綺麗な女の人の運転する車で、セントラルホールの
駐車場に入つていったでしょー！」

「えつ？、なんでそんな時間にそこ叩撃するかな～～

「だつて、新入りは会社に早く来なくっちゃね！」

「てか、それ早すぎだろ？」

「いいんです、いいんです！

それよりも彼女ですか？

やつぱり彼女ですよね～、朝帰りだしい」

岡本はニヤついた顔で慶に言った。

「残念ながら違います！

彼女ではありません！」

「え！？　じゃあ何なんですか？

あんな綺麗な人滅多にいないし、

だいたい、彼女じゃない人と朝帰りなんて変ですよ？」

「ん・・・。それを言われると困るな・・・」

見かねた亮輔が

「ああ、慶の幼馴染でね、彼女今一人暮らししてるらしいんだけど
昨日、熱があつたみたいで、慶にヘルプがかかったの
だからその時慶と一緒に居た俺が言つてこいつて
無理やり彼女ん家に泊まらせたわけ」

半分本当で、半分嘘の話を即座にでっちあげた。

「ふう～ん、なあ～んか怪しいけど

そうだつたんですかあ～

折角ネタができると思ったのになあ！」

「なんだよネタつて！！」

慶は思わず突っ込んだ。

「でもあの人綺麗だつたな～」

「ん？ 誰？ 誰？」

「誰が綺麗だつたの？」

丁度そのタイミングで山下が休憩室に入ってきた。

「をつ！…！」

山下は思わず声を上げたが、すぐに我に返った。

(「この子達超かわいい・・・」)

山下も岡本と山田の可愛さに驚いた。

「んで、慶さん、誰が綺麗だつて？」

「ああ、この工場の受付をされてる女性の方の事を話してたんですけど

岡本がすぐさまフォローを入れた。

「ああ、京子さんね！」

山下は慣れ慣れしく京子さんとか言つてゐるが
実はほとんど面識はない。

工場でも一番の美貌の持ち主として有名な受付嬢だ。

「ああ、京子さんね・・・」

慶がなんだか暗い声で答えると

「さ、行くか～～」

亮輔がそれに合わせるかのよつと音で一人とも休憩室から出て行つた。

「なんだ？あの一人……、ねつー！」
慶と亮輔の雰囲気が少し変わってしまったことに誰もが気づいていた。

それから山下は話題を変え、やたらと自分をアピールしようと、5分ほど一方的にしゃべり続けた……。

「あ、それで昨日はあゆみちゃんとジーだつたんですか？」
慶は亮輔と一緒に事務所へ向かいながら、亮輔に尋ねた。

「ああ、昨日？まあね！」

「なんすか！？ そのまあね！って！
いいな、亮輔さんはいつもモテモテで
ゆきさんでしょ～、あゆみちゃんでしょ～、
」前のプラネタリウムの彩ちゃんともいい感じだつたし…」

「ははは、やうかね……

きつと騙されてるだけだよ俺達！」

亮輔は自分がホステス達にモテテ「る」とは、自分ではまったく思っていない。

ただ、これが普通だと思っているようつだ。
人から好かれると言つことに関して、小さな頃からそうだったため
に無頓着なのだ。

「でも、いっすよ、亮輔さん絶対モテモテだつてー！」

「でも香織ちゃん、俺が知ってる女の中じゃ一番綺麗だけだな～」

そんな雑談をしている間に、事務所のドアの前まで来ると

(ガチャ)

丁度、事務所の中から1人の女性が出てきた。

「あ・・・、森山さん、中野君、こんにちは・・・」

(げつ・・・・)

慶は思わず心の中でそう思つた。

事務所から出てきたのは、休憩室で丁度話の出た畠野 京子であった。

「ちわっす・・・・」

慶は小さな声で挨拶を返したが、亮輔が挨拶を返す事は無く、ただ、皿を合わさないようになっていた。

京子は、軽く会釈をするとすぐ『早歩き』で去つて行つた。

「俺は京子さんが一番綺麗だと思います・・・・」

慶は小さな声でそう言つたが、亮輔は黙つて事務所へ入つていつた。

今日はノー残業デーであるため17：00になると、従業員は全員帰つていつた。

慶と亮輔は、少し仕事が残つているため、まだ事務所に残つてゐる。慶の方が、少し早く仕事を済ませ、それから10分くらいして亮輔も仕事が終わつた。

「亮輔さん、歓迎会しませんか？」

「ああ、そういう俺もそれ考えてた」

それから一人は、次の土曜日に新入りの歓迎会を計画することにした。

「じゃ、これから歓迎会の打ち合わせに行くか！？」

「ああ、打ち合わせですね！？」

打ち合わせといつも意味は無く、これから外食に行こうかと亮

輔が誘い

慶もそれに応えただけのことであった。

二人は結局いつもの居酒屋へ来ていた。

居酒屋へ着くと、慶がおもむろに携帯を取り出しメールを打ち始めた。

「お、めざらしいな、オマエがメールするなんて」

「あ、すいませんちょっと待ってください。」

（約束だから仕方ない・・・）

「ははあ～～、香織ちゃんか・・・」

「知りませんーー！」

慶は香織に香織の体調のこと、仕事が終わり亮輔と居酒屋にいること

とをメールした。

すぐに香織から返信があり、店に出勤する前に「おつかれ」と書いてあった。

そのメールを見た慶は

「げつ！！」

思わず声に出してしまった。

「ん？どうかしたのか？」

「ああ、すいません、後からちょっと香織がここに来るかもしだません・・・」

「いいですか？」

「ああ、いいよいよ、俺も香織ちゃん見れるの嬉しいな～～
亮輔は一やついた顔でそう言つた。

一人がビールを飲みながら、晩飯を食べ始めてじばらくすると

「やつほー！」

香織がやって來た。

「おっ！香織ちゃん、いらっしゃい！」

亮輔がすぐにそれに気つき香織を迎えた。

「オマエ、もう店出れるの？」

「うん、昨日慶が来てくれたから、もう元気になっちゃった・・・」

香織は恥ずかしげもなくそう言つて、

勝手に慶のビールを飲み干した。

「あ～あ、見てらんない・・・」

亮輔は香織が慶にやつこんである事を確信した。

「亮輔さん、昨日は「めぐね、慶と一緒にいたんでしょ?」

「なんで知つてんの?」

「だつて、慶が自分の意思だナドわざわざ家まで来るはずなこもー
くん!」

「わつと、亮輔さんが行つてこいつて言つたのかな~って思つて

「お~、香織けやん、読みが深い・・・」

「慶、昨日はほんとあつがとうねー。」

「それじゅ、私もう行くからー。」

「えつー・・・はやつー。」

「だつて、もう遅刻しそつ」

「あ、もうみんな時間なんだー。」

「よかつたら飲みにも来てねー。」

「それから慶、明日も明後日もちやんと私にメールするんだぞー・・・

「はいはい、わかつてますよ・・・
てか、亮輔さんの前でそんなん言つなよ・・・」

「関係ない! それじゅ、またね! バイバイ~イー。」

「うう、このつと香織は急いで店を出て行った。

「なんなんだ・・・」

「台風みたいだつたな・・・。でも、慶にお似合いだぞー。」「てかや、何？毎日メールとかなんとかつて」

「ああ、今日の朝約束させられまして・・・」

「はは～～ん、また寄り戻したか？」

「いいえ、そりじやないんですけど、なんかそういう雰囲気で・・・」

「

「オマエ、付き合いつ前から尻に敷かれてるんだな～～」

「アハハ・・・、付き合いつ前つて、付き合いつかはわかんないじやないですかあ！～！」

「ま～いこじやん、いこじやん、オマエらひこ「ハビ」だよ、まじで」

「しかし、店に出入の前の香織ちゃん、マジで綺麗だったな～」
た。

「しかし、店に出入の前の香織ちゃん、マジで綺麗だったな～」

「やつでしたかね？」

「やつま言つてゐるが、慶も同感だつた。

「ねえ、亮輔さん、言つていい？」

「ん？ 何の事？」

「京子さんのこと……」

「ああ、それは……」

「でも……」

「でもも、くそもない。俺はふられたんだから……」

「でも、きっと京子さんだって今でも亮輔さんの事が好きだって思
いますよっ。」

「うるさいなあ～、もうこいつから。

「俺こはあゆみとかいるから……」

「あ～あ、そりやつてあゆみちゃんに逃げてるんだー？
もしそりだつたら、あゆみちゃんがかわいそうじやないですか？」

「いいの、俺はあゆみが今好きなの……」

「へえ～～、そりなんだ……。うわつきーーー！」

「めた。」

せきのす話で話すのを
慶はそりせりながら聞かれて、それ以上京子のことでは話さないといふことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4200c/>

リトルタウン

2010年10月12日02時36分発行